せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-2590
第172号・平成16年1月1日

年表で読む 古平の歴史

《78》

古平のたら漁

■世界中で人気のタラ

タラは北方の海域で多く獲れますが、味が淡泊で生真さが無いことから魚肉を余り食べない欧米人にも好まれ、料理法もいろいろあって世界各地で賞味されている魚です。

「たら腹食べる」という言葉がありますが、タラは文字通りたら腹食べられている魚でもあります。

賀正
平成十六年 元旦
古平町史編纂室

タラは日本人も大好物でかなり漁獲しているようですが、世界ではソ連・イギリス・デンマーク・スペイン・ノルウェー・カナダ・フランス・チリーなどと続いて、日本は世界の僅か2パーセントしか漁獲がありません。

もっともタラの漁場は、大西洋北部、北アメリカの大西洋側が最大の漁場で、いずれも日本からは遥かに遠い場所です。

■日本のタラ漁場

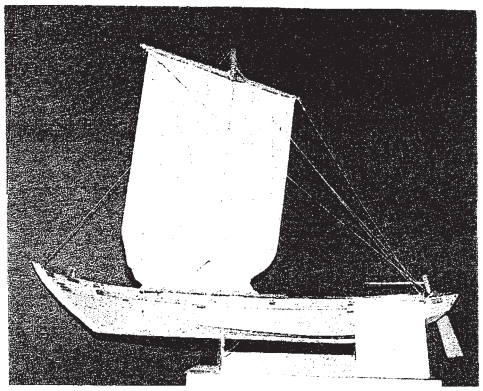
日本沿岸では、島根県以北の日本海側と茨城県以北の太平洋側が漁場で、北海道では沿岸一帯が漁場となっていますが、古平の漁獲高は、昭和一〇年の三七万八千貫（約一、四一八トン）が最高で、戦後では昭和二三年の八万貫（三〇〇トン）を漁獲してからはスケソ漁の専業が多くなり、統計もはっきりしません。

■古平のタラ漁の始まり

鰊漁場の出稼ぎに新潟県・山形県から来た人たちの中で、そのまま滞在してタラ釣り漁を始めた人がいました。

漁法は延縄（はえなわ）、船は小型の越後川崎船でした。川崎船は長い間漁船として使用された船で、古平では単に「かわさき」と呼んでいました。

川崎船は波を乗り切るのに適し船足が速く、帆走にも便利な船だといわれています。



また、タラ漁に船団を組んで新潟県辺りから来る人たちもいて、晩秋の一〇月頃か、鰊漁の始まる前の三月頃、川崎船に一〇人くらいが乗り込み、出港地で米やみそなどの仕込みを受け、古平に着くと家や干場を借りてタラ漁をします。

漁具は延縄で、好漁だと一日の漁で三〇～四〇束（一束＝二〇尾）を揚げ、漁期間には五〇〇～七〇〇束の漁獲がありました。これを新鱈（うす塩をしたもの）、棒鱈（腹を割いて頭を取り干したもの）、開き鱈（腹を割いて塩をし干したもの）にしていましたが、開き鱈は主として中国に輸出されていました。

五、六月頃、漁期が終わると漁獲物を売却し、その収益は漁期間の経費を引いて、残金はそれぞれに配分されました。

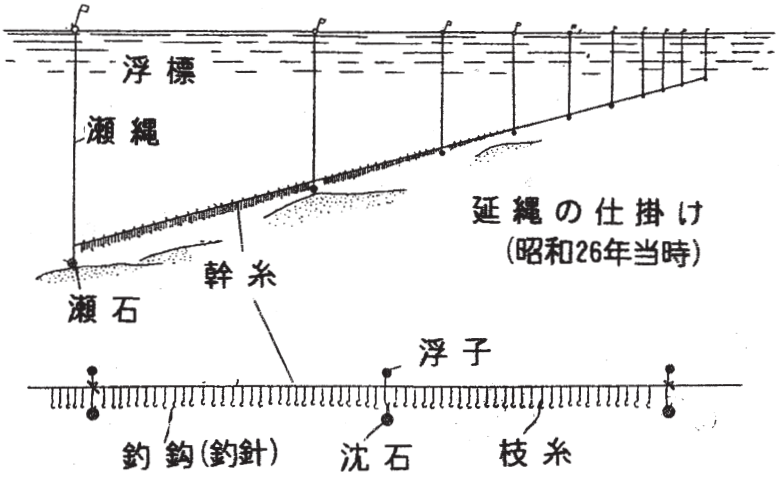
漁船＝一人分・漁具＝二人分
船頭＝一人三分・若者＝一人分
女＝四分　という割でした。

一人の収入は二〇～三〇円でしたが、この外、鰊漁期には枠船を引く仕事を請け負い、報酬として鰊の現物を受け取って

いましたが、鰊豊漁の年は五〇～六〇円の収入になったといいます。

■松田力太郎談―タラ漁

明治三八年、二〇歳のとき仲間と組んで古平へタラ釣りに来た。正藤沢・本本間・セ山崎という海産商から、米、みそ、しょう油などの仕込みを受け、家も借りた。



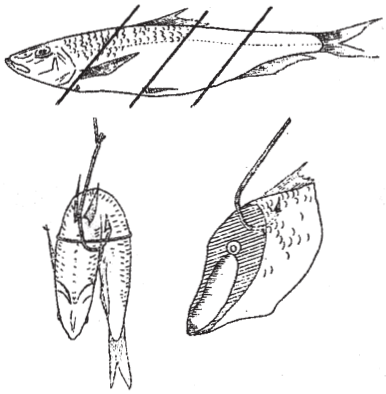
タラ縄は内地から麻を買って来て糸(幹縄)をなった。一日に二八〇匁(もんめ・約一キログラム)で八〇尋(ひろ・約一二二メートル)の縄をなうのが一人前と言われた。

ヤメ(枝糸)を撚る(よる)のは女の仕事で、麻を細くして撚りをかけ糸にした。釣針は針金にやすりをかけて磨りこしらえた。

タラ船一隻に縄かご一〇〇枚を持って出漁し、ほとんど満船になった。縄かごの数はだんだん多く持って行くようになった。

一日五〇束釣ると満船になった。タラの大きさは、一尺四寸(七三センチ)以下はポンタラとした。餌はタコを二〇貫(七五キロ)も使い、鰊が獲れると鰊を掛けた。

一〇月二〇日から出漁し、翌年の五月一〇日に終わった。船一隻で千束くらい獲ったこともあり、一五〇円も揚げると大漁であった。最高に獲れた年は船頭で四三〇円、漁夫で三〇〇円にもなったことがある。腹に塩を入れた新鰊は東京方面へ出荷した。

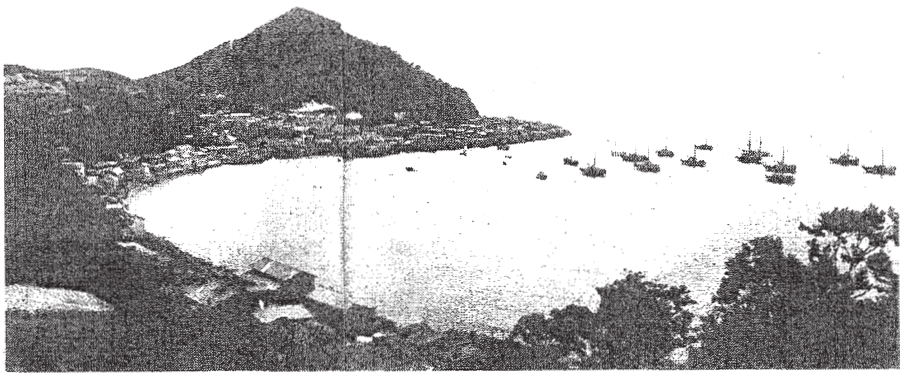

鰊を餌にして釣針に掛けた図

二七歳のときから船頭をし、日露戦争(明治三七、八年)の頃は月給一八円だった。沖へはかっぱを着て行くが、ぞうりばきだった。弁当のおかずは、みそ、漬物だけで、食料は自分持ちだったから金のかからないよう倹約した。

棒鱈は八束で一梱(こり)、二〇貫(七五キロ)ぐらいあった。

昭和二年、川崎船を八五円で買い、岩崎造船所で発動機船に改造した。一〇馬力の電気チャッカーを一〇三〇円で現金で買って取り付けた。

同じ頃に移住して来たのは、本間銀松、小林五太郎、須貝松太郎という人たちでした。


⇦ 明治43年当時、古平湾内に停泊している帆船

当時の世相を見る

高野名幸作さんの日記から

【73】

大正一一年

▼一〇月一九日

今朝七時頃から風が強くなり、海も時化てきた。浜町八反田の葬式があり送りに行く。店はハイカラ縄、タラ縄がポツポツ売れていく。午後からは風がますます強くなり、海も大時化になった。本陣の浜のリンゴ積みの船は、荷を降ろして船を巻き揚げている。五時頃に板戸を閉めたが、沖風で板戸はガタガタ、波の音も恐ろしく聞こえる。大謀網などは被害が出るのではないか。

▼一〇月二〇日

昨日来の暴風と時化は今日も一日中続き、余市船便も止まったままだ。父は四時頃から起きて、火を焚くやら倉の後片付けをし、リンゴの囲いを作っている。妻は倉の二階の片付けをする。午後からリンゴ担ぎをし倉に入れる。一時に役場へ行く。過日の品評会での賞状、賞品の授与があり、平田、田岸、石井さん等が優等の方だ。終わって余市方面でとれたリンゴの試食会があり、いろいろ食べてみた。三時頃帰る。夜になって風も少し静かになり、海もナギたようだ。

▼一〇月二一日

今日は珍しく晴天だ。この秋晴れで大根抜きなどしているところが多い。小樽岡崎へ大根、かぼちゃ、キャベツなど、五個箱詰めにして川崎船で送る。

▼一〇月二二日

今日は観楓会だ。一〇時に支度して水産組合に集まる。一行は㋚斉藤、斉藤兼太郎、㊐支店、㋓、㋑、㋝、㋟、米田、渥美、原田さん等だ。秋晴れの遠足は気持ちがいい。種田の畑で六号リンゴを一斤宛買う。途中二回程休んだが、一一時、すりばち山頂上に着く。四方を眺める。海岸から遠くを見渡せ、古平町一帯が眼下に見える。辺りは八分通り紅葉し気分も良い。火を焚き、炊事の準備に取りかかったら雨、仕方なく急いで下山する。㊥の畑で休む。支店の畑を通り、㋑公園へ行き新築の別荘を見たが立派だ。公園でブリ鍋をやる。野天にむしろを敷き、車座になり談笑する。酒盛りも楽しい。三時に出発、鮭、鮎のふ化場を見て帰る。時々雨が降り、四時頃帰ったが疲れた。

▼一〇月二三日

起床七時、晩秋の雷雨に大アラレは近年稀なことだ。聞けば写真館の屋根ガラスが二〇枚余りも傷んだという。リンゴにも穴のあいたのがあったとのこと。アラレの大きさは径一寸くらいもあった。あんな大きいのは老人達でも知らぬとのこと。父は朝早くから農園行き。出面の人とポプラ切りをやる。この頃は気分がいいと言っている。聞けば昨夕、古平を出帆した川崎船が大アラレの中蘭島沖で遭難したが、幸い人命は無事だったとのことだ。午後三時頃農園へ行ったが四九号はよく色づいている。

▼一〇月二四日

天気快晴、店は閑散。皆農園へ行きリンゴもぎをやっている。大謀はこの頃マグロ、ブリなどが揚がっている。

▼一〇月二五日

天気快晴、秋始末でどこも忙しい。大根ぬきはどこでもやっている。過日の大アラレでリンゴにも大分傷がつく。こんな大アラレは未曾有のことだ。文治は学芸会で花咲じいさんに出て、欲ばりじいさんをやることになり、毎日学校で稽古をし帰りも遅い。うまくやれるかどうか。電気会社では、昨晩から戸外に五百燭光の大電球を点灯したので、子供達は明るいといって、夜七時頃までワイワイ騒いで遊んでいる。

▼一〇月二七日

時々雨が降る。今夜から亡母三回忌の仏事で、家では支度に忙しい。佐渡の㊥から柿、マツタケ、ユズなど小包便で送って来た。ちょうど仏事に間に合い好都合であった。五時頃、美国の婦美大謀からロープを買いに来る。五丸で三〇〇円余り売る。

▼一〇月二八日
　起床六時、今日は亡母三回忌の仏事当日だ。八時頃から手伝いが五、六人来て忙しい。末政桶屋の主人の葬式があり父が送りに行く。一二時頃、和尚さんが来て読経をする。一時から法事の膳を出す。寺方も入れて一一人、三時頃終わって寺参りをする。時々雨が降ったが四時頃終わって帰る。夜は後片付けをし、港町の姉は子供達三人といっしょに泊まる。

▼一〇月三〇日
　起床六時半、珍しく快晴だ。秋始末で何かと忙しい。月末なので新地方面へ掛け取りに行く。太陽がテカテカと輝き夏のような空だ。こんな天気もまた珍しい。早く秋始末を終わらせねばと皆一生懸命だ。農園では四九号をもぎ倉に入れる。桐を売った残金を受け取る。

▼一一月一日
　今日、学校で午後三時から学芸会があり、梅野さん等と見に行く。今年で学芸会も二〇回余りになるが、皆なかなか上手だ。文治の欲ばりじいさんもなかなかやる。電気がついて舞台も大変明るく良くなった。一〇時過ぎに帰る。

▼一一月三日
　昨夜からの雨は晴れたが、海は時化だ。学芸会は、今日は新地方面の人に見せるとのことで、文治も幸治も早くから出かけた。店はポツポツ忙しくなってきた。聞けば、某海産商が胴鰊、その他で損害を受け、信用組合へ倉入れする荷物を売り払い、その代金二千数百円を持って昨晩から行方がわからなくなり、警察ざたの騒ぎになっているとのこと。困ったことだ。鰊製品などが暴落のため、いろんな悲劇が起こるのだ。

▼一一月四日
　天気快晴、共栄丸が小樽へ行くので、大アバ縄一〇個積んでもらうため、港町の倉まで自転車で行く。馬車に積み込み本陣の浜まで運搬した。農園ではリンゴもぎや樹を切るのに天気で好都合だ。文治と幸治は三時頃から学校へ行く。妻と熊さんは今夜の学芸会見物に行く。

▼一一月五日
　起床七時、中一へ行く。ガンズ網千間の注文を受けた。帰途、㊥へ寄り貸し方の請求をする。鰊粕、七月頃は三、八〇〇円の値がつけられていたら、先日、二、六〇〇円で売ったとのこと。二五〇石で三、五〇〇円程の値下がりになり大打撃だ。夜、妻は禅源寺へ中日のお参りに行く。寒い寒い夜であった。

▼一一月六日
　起床七時、昨夜来の寒さが厳しく、今朝は町にも霜が下りて一面真っ白になった。禅源寺の寺参りがある。父と熊さんは下肥を農園へ運んでいる。店はカレ網支度でポツポツ出る。しかし、三、四年前のようには出なくなった。夜、父は野沢さんの通夜に行く。心臓病で急逝したとのこと。昨晩は祝宴、今日は通夜と実に世の中はわからない。

▼一一月八日
　起床六時、この頃一番の早起きをした。海岸を散歩する。後、農園へ行く。出面連中がリンゴの肥料をやっている。秋も深くなり、四方の山は赤く、落葉松の葉も落ちた。私は花の種五、六種をとる。店は岩糸などが売れて行く。四時頃から、雨に風がまじり海は時化になった。

▼一一月九日
　昨日の雨は夜半に上り、今日は快晴。父も妻も熊さんも農園行き。キャベツなど取って来て漬物の準備をする。夜になってまた雨が降り出す。

▼一一月一〇日
　朝から雨風が激しく、時化模様になってきた。妻は越中屋で仏事があるというので手伝いに行く。一昨日の時化で、一隻で縄五〇枚から六〇枚くらい流失したとて、今日も岩糸などが売れていく。午後から寒さが強くなりアラレが降る。寒いのでこたつを掛けた。

▼一一月一一日
　朝起きて四方の山を見れば、一面に真っ白く雪が降っていて冬景色だ。浜へ出て見る。海はナギだが、大謀漁は思わしからず一向人気がない。妻は今日も朝早くから越中屋へ仏事の手伝いに行く。悦三も、母ちゃんが朝から夜遅くまでいなくてもおとなしくしている。夜、鶴間でカシワの馳走するからと呼びに来る。酒とカシワ鍋の馳走になり一一時帰る。

▼一一月一二日

一一月中旬だというのに小春日和の上天気。秋始末には実によい。この朝は五時半に起床し、まだ薄明かりの中農園へ行く。ようやく夜が明けた。あちこち散歩して八時帰る。越中屋仏事で父や妻等家族四人が行く。私は店番だがなかなか忙しい三時頃、子供達が馳走を貰って帰って来る。この夜は電気のつくのが二時間も遅れ、ローソクだ、ランプだと大騒ぎ。

▼一一月一三日

午後から雨になり、道路はまた悪くなった。妻は越中屋の仏事の後片付けの手伝いに行き、四時頃帰る。

▼一一月一五日

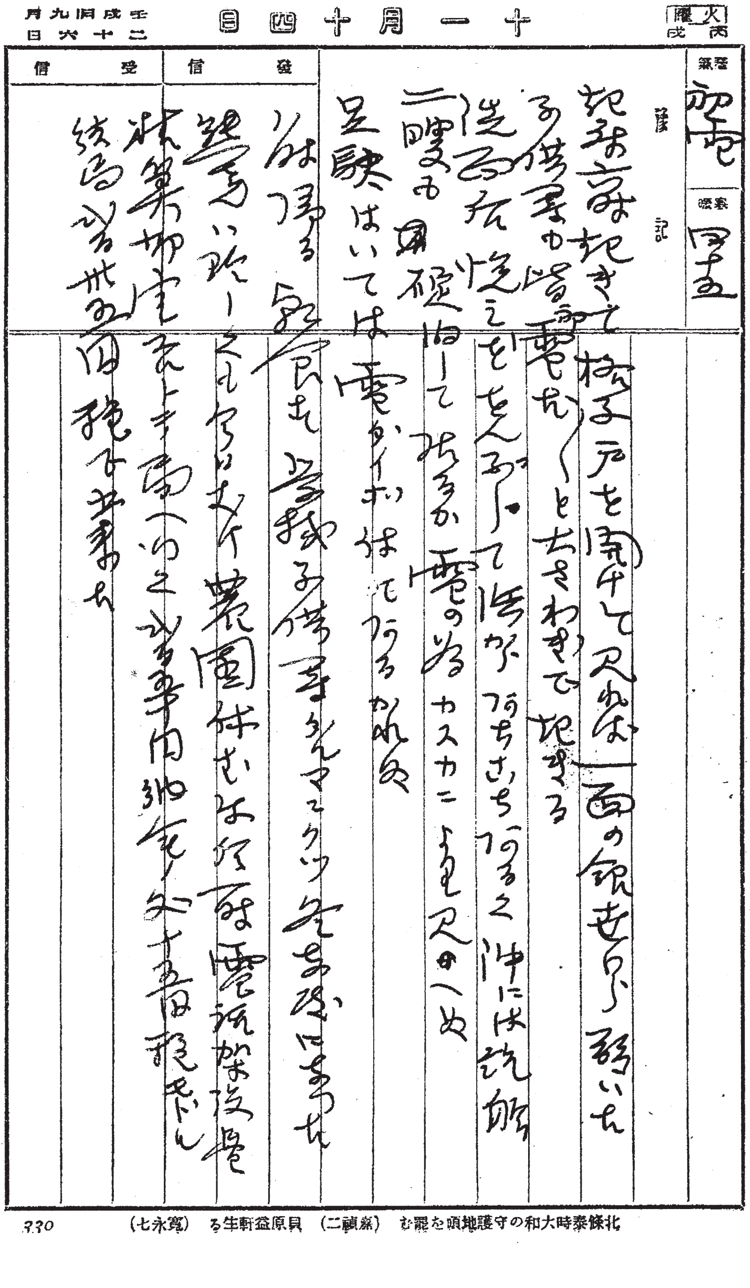
寒い寒い朝だ。チラチラ雪が降り一日中寒中の如し。農園も休む。店はカレ網支度で忙しくなってきた。綿糸相場二三〇円だ。

＜日記の原文から＞

十一月十四日　火曜　丙戌
天氣 初雪・寒暖 四十五

起床六時、起きて格子戸を開けて見れば一面の銀世界驚いた。子供等も皆初雪だくくと大さわぎで起きる。洗面后、悦三をおんぶして浜から阿ちこち阿るく。沖には汽船二艘も停泊して居るか、雪の為カスカニよ里見へぬ。足駄（あしだ＝歯の高い下駄）はいては雪ダイゴ（ダンゴ？）付て阿るかれぬ。八時帰る。朝食す。学校子供等ダルマニクツ（ダルマグツ＝ゴム長靴を切り取ったような形をしたゴム製の短靴のことだが、これは方言らしい）冬支度になった。熊さん八珍しくも今日丈け農園休む。午後一時、電話架設費清算勘定スルトテ局へ行く。弐百五十円納金の処十五円程モドル。結局、弐百世五円程で出来た。

※電話架設費＝大正一一年、電話を架設するのに二三五円かかったとありますが、現在の物価は当時の約一万倍ですから、今だと二三五万円！　当時の古平町長の俸給は月額一〇五円、古平小学校長は一二〇円（ボーナスなどは一切無し）でした。町内の電話架設数は一一二台。


十一月十四日　火曜 丙戌　壬戌閏九月二十六日
天氣 初雪　寒暖 四十五
發信　受信
起床六時起きて格子戸を開けて見れば一面の銀世界驚いた
子供等も皆初雪だくくと大さわぎで起きる
洗面后悦三をおんぶして浜から阿ちこち阿るく沖には汽船
二艘も停泊して居るか雪の為カスカニよ里見へぬ
足駄はいては雪ダイゴ付て阿るかれぬ
八時帰る朝食す学校子供等ダルマニクツ冬支度になった
熊さん八珍しくも今日丈け農園休む
午後一時電話架設費清算勘定スルトテ局へ行く
弐百五十円納金の処十五円程モドル
結局弐百世五円程で出来た
330　北條泰時大和の守護地頭を罷む（嘉禎二）　貝原益軒生る（寛永七）

申年に寄せて

大澤文子

冬を告げる小さな使節、雪虫が舞いはじめると一気に新年を迎える季節となる。

二〇〇四年は暦法でいう十二支の申年。街々のウィンドーには猿公が登場、家庭用品はては食品類までにも愛らしい猿公が買い物客の目をひく。

また、暮れから正月休みにかけて外地で過ごす人々のなんと多いこと。芸能人然り、親孝行と称して家族旅行も一段と多い。行き先は冬でも暖か、それに割安等の理由もあり、例年ハワイが一位にのしあがる。

旅行のニュースも終末を告げる頃になると、新春行事の七草粥の日がめぐってくる。

七草粥を食べると一年中病気をしないという謂れがある。伝統的な七草といえば「せり、なずな、ごぎょう、はこべ、すずな、ほとけのざ、すずしろ」等々、古書に載っていた床しい感じはするが、現代にはなじみがうすい。

現代の新七草といえば「葱、三つ葉、春菊、レタス、キャベツ、菠薐草、セロリー」の類であろう。年どしの生活の変容が濃淡にさまざまな影をおとしてゆくのは確かなのだろう。

風邪をひかぬ者は「ばか」と古い言い伝えさえあるが、私はあまり風邪をひかない。例年、正月休みにはこの時とばかり呑気にテレビの画面を追うのみ。

成人の日には各放送局が競ってアイドル歌手達にマイクをむける。

「成人の日を迎えたあなたはどのように過ごしますか」

「どんな気持ちですか」

くだらない質問を執拗に浴びせかける。アイドル達は無理に笑顔をつくり、

「ハイ、今年はマイペースで」

「ハイ、がんばります」

「ハイ、夢を実現させます」

二回、三回と映る画面にほとほと飽きを感じる。

「夢」といえば、日本人は夢がお好き。何年か前に、ある企業が漢字読み書き大会に百の漢字を示し、好きな言葉を選んでもらったという。ところが、

「夢、誠、愛、愁、和・・・・」等の順序だったという。

好きな言葉や文字は足りないものへの願望であろう。だが二〇〇三年の世相を象徴する今年の漢字は「虎」と決定。

一二月一三日朝刊の一面に全国から公募した結果、見事「虎」が一位、猛虎の文字が目を射た。

「虎、戦、乱、冷、選」の順という。

「元気をもらった！」人々の強い声。同感！　とばかりその夜「虎」の文字を墨くろぐろと書いてみた。

よし！　二〇〇四年はこの線でいこう。風邪などひいていられない。もし私に「今年はどのようにして過ごしますか？」と問いかける酔狂なひともいないが・・・。勿論、マイクを向けるひともいない・・・が、ひとりで質問してひとりで答えようか。

○まず適度な運動で汗をかく

○脳細胞に刺激をあたえるため文字を書き続ける。

○いい年をして・・・と引っ込み思案にならない

○オシャレに徹しよう

○新しい異質な体験にも挑戦してみよう　等々、

積極的な意欲が生き生きとした人生に通じようというもの。

何年か前であったが、女優・作家である高峰秀子の正月対談を面白く聞いた事があった。

臆面もなくポンポンと冗談をとばし、心の底から鋭い意見を吐く。時々、対談相手をドギマギさせる小気味よさ。お互いに「救急車と呼びあう大切な「同志」のことも淡々と話す。退屈させぬ四〇分間であったことを思い出した。

私にもお互いに「救急車」と呼び合う大切な「同志」がいる。いつか必要な時期にはきっと「心の救急車」として走らせたい。

―札幌通信　第13信―

一期一会

吉川義雄

仏教用語とばかり思っていた、重みを感ずる一期一会という言葉が、お茶の世界のものと知ったのはつい最近のこと。

茶道の体験がないから深い意味はわからないが、再びお会いする機会があるかないかわからない人と覚悟し、礼と誠意を尽くして、一服のお茶で接待することを指す言葉らしい。

そうと知ると、これまでの人生の中で「しまった」と、悔やまれる思いがいくつもある。

ふるさと古平で、四季を彩る美しい風のように多くの郷党が居てくれ、何の懸念もなく、その中で安住させていただいた。

私が二十歳を少し過ぎた頃、勤め先の札幌の店に、学友が頻繁に尋ねて来てくれた。

旭川や月寒の連隊に入隊するためで、懐かしそうにみんな笑顔を見せてくれた。

小学校時代の親交の度合いや、自分の好き嫌いで、店先だけの挨拶で終らしたり、喫茶店に誘っての密な別れもあった。

私自身も間もなく戦陣に。四年後、古平にたどり着き、彼らの消息を尋ねて愕然とした。そのほとんどが戦死していた。

もしあの頃、一期一会の、人を遇する崇高な理念のほんの一端でもわが身にあれば、無念の思いがこんなに深く刺さってこなかったろう。

今から三十年程前。札幌の街角で数人の若い女性たちに呼び止められた。京都の同志社大学を間もなく卒業するらしく、想い出に道内旅行をしている仲間たちだった。

小さな女性雑誌の編集長をやらされていた私の方が、好機とばかり案内して、道庁、北大、時計台と、親身になって巡り歩いた。

彼女たちが京都に帰ってから、リーダー格だった女性からすぐに礼状が来た。

彼女との文通は、途絶えることなく今も続いている。留学中のイギリスから。故郷の尾鷲市から。京都の大学教授との結婚。そしてりっぱに成人した二人のご子息のこと。時には写真が封入されているから家庭のムードがよくわかる。誠実な方である。

誠実というと、古平とかかわる女性が居られる。この方とは、不思議にも今もって一度もお会いしたことはないのだ。

85年の暮。彼女が投函した私への賀状は石倉姓だったが、明けて一月半ばの寒中見舞いには姓が改められ、「菊」清美さんになっていた。「正月は南欧スペイン」にて、とあったので新婚旅行とすぐ察した。

彼女との交流の始まりは、自分で作詞したくせに古平中学校校歌の歌詞がうろ覚えで、何かの文章に必要になり確かめるために電話したとき、明るい声で繰り返し親切に教えてくれたのが彼女である。

以来。高校教師の夫君が転勤してどこに変わっても、必ずお便りをいただく。

札幌在勤のときは、お会いできる最良の機会だったのにそれも逃してしまった。今は置戸町からオホーツク海周辺の風景を、心豊かな文面で知らせてくださっている。

彼女自身の飽くなき勉学は、時に札幌まで足を向け、平和への願いと人類への愛情は、NGOとして真剣に取り組んでおられる。彼女とお会いする日は必ずあると信ずる。

浅利（旧姓高野名）喜美子さんからのお便りは、私からのはがきに打てば響くようにはね返って来る。小気味のいい速さであり、古平会や役場会の懐かしい会合も途絶え始め、他の方々からは年賀状だけとなったのに、彼女の誠実さは別格である。

旅行の多い彼女からの絵はがきは、私の手元に、美しい彼女の足跡を次々に重ねている。

一期一会。今世で縁した方々は、それが因となり果となって永劫の未来世まで、美しい交わりを続けるとか。大切な方々である。

古平いろはうた

ん　ンだンだ　みんなで知恵出せいろは歌

■古平いろは歌余話

今回で、当初予定していた『古平いろは歌』が終わりますが、作り始めたヒントというか、そんなことを最後にちょっと書いてみたいと思います。

何となく、いろは四十八文字を頭にして古平の歴史や特色などをよみ込んだ、いろはカルタ風の歌らしいものをつくって、古平のことを身近に感じ、知ってほしい、そんな考えから、つれづれに思いつくままに鉛筆片手に書き留めてみました。

歌を読んだときの音の調子から、五・七・五の俳句調に決め、始めてみると、スラスラと二〇余りが立ちどころに出来上りました。「こりゃわけない」と、ひとまず終わりました。

折りをみて次に取りかかりましたが、同じ音のものはどんどん出来ますが、なかなか四十五文字は埋まりません。少しずつは出来ましたが、完成させないことには何にもなりませんので、全問正解を目指してがんばりました。

最後の二、三文字が難関で、歩きながら、食べながら、寝ながら・・・そのうち寝てしまいましたが・・・。とうとう最後に残ったのが「も」で、どうにもならずに苦しまぎれに？　できたのが、『もう一度逢ってみたいな羅漢さん』で、最後の頼みはやっぱり羅漢さんということで無事完成に漕ぎつけました。

あれもこれもといろいろありましたが、それはまた次回で。

■懐かしいいろはカルタ

『古平いろは歌』について、それにかかわる事柄を書いてきました。同音のを・ゐ・ゑは省いて、「いろは四十八」のうち四十五文字をよんでみましたが、「ん」でひとまず終わります。

昔ーといえば戦前になりますが、お正月の子供たちの室内での遊びはいろはカルタ、双六（すごろく）、年長者からは板カルタが一般的でした。

たとえ話を句にして、いろは四十八文字をその初めによみこんだ教訓的なものですが、これには江戸・大阪・京都のものがあって、北海道では江戸のものが使われていました。

それぞれ内容の違うところがありますが、どれにも「ん」はありません。普通は「ん」から始まる言葉はないので、いろはカルタでは終わりは「京」という字が当てられています。

江戸＝京の夢大阪の夢
大阪＝なし
京都＝京に田舎あり
となっています。

ひとことつけ加えますと、「京の夢大阪の夢」は、夢の話しをするときに唱えることばとして、昔のことわざにあるそうです。

「京に田舎あり」は、賑やかな都にも、さびしい田舎のようなところがある。その意味が転じて、どんなよい土地にも悪いところがある、ということです。

■無理やりの「ん」

さて、問題の「ん」ですが、いろはカルタにならって、

「京の夢大漁の夢」
「京の夢豊作の夢」
「京の夢商売繁盛の夢」

も考えましたがいまイチか？

話に納得して「うん、うん」とうなずくと、相手にも喜んでもらえますが、「うん、うん」と返事すると、「うんという返事はない！」と叱られます。省略して「ん、ん」とも聞こえますが、発音は「ぅん」ですから正しくは「ぅんだ、ぅんだ」というところでしょうか。

普段余り気にもしないが、古平にはこんないいところがありますヨ、ということを再認識してもらえれば幸いです。

古平いろは歌一覧

い石倉が鰊の繁栄語り継ぎ〈石　倉〉
ろ六三制戦後生まれで難産し〈六　三　制〉
は泊月の句碑を照らして盆の月〈野村泊月句碑〉
に鰊群来ソーラン節の大合唱〈鰊　大　漁〉
ほホッケ澗にヤマセを避けて弁財船〈沢江ホッケ澗〉
へ平成に今よみがえる宝海寺〈宝　海　寺〉
と灯台を目指せば家族の待つ港〈築港完成〉
ち鎮魂歌朝日を受けて丘に建つ〈鎮魂歌詩碑〉
り旅行村自然の中ではずむ声〈古平旅行村〉
ぬ抜け出したそば喰い地蔵の願応寺〈願　応　寺〉
る留守番は猫にまかせた鰊どき〈鰊　群　来〉
わ鰐口を打ってお詣り恵比須さん〈鰐　　口〉
か開拓の苦闘を語るロクシナイ〈ロクシナイ〉
よ夜が更けて信者で賑わう庚申さん〈庚　申　碑〉
た立ち昇る古平温泉湯の香り〈ふるびら温泉〉
れ霊場の岩場に残る観音像〈観音滝霊場〉
そその昔リンゴで栄えていま団地〈栄　団　地〉
つツルノッペ草に埋もれたイチゴ畑〈ツルノッペ〉
ね願いごと鬼子母神の正隆寺〈正　隆　寺〉
な仲間みな集いて語る秋天下〈高野素十句碑〉
らラッパ鳴りススキナイでの射撃会〈ススキナイ〉
む昔から海の安全観音さん〈丸山青峯観音〉
うずを巻きイワナが跳ねる廻り淵〈廻　り　淵〉
え蝦夷錦誉れも高い素友歌碑〈今中素友歌碑〉
ののろし台シリバの岬と相対し〈丸山のろし台〉
お大晦日平和の鐘が鳴り響き〈平和の鐘〉
くクマあそぶクマの神社の名の由来〈熊野神社〉
や山紅葉古平平野は黄金色〈古平の稲作〉
まマンガンで稲倉石は日本一〈稲倉石鉱山〉
け競馬場中学生がランニング〈競　馬　場〉
ふフジ、サクラ緋鯉も群れる偕楽園〈偕　楽　園〉
こ来ぬ人を待ち続けてるセタカムイ〈セタカムイ〉
て出羽丸の美談伝えるシコロの木〈出羽丸遭難〉
あ赤い崖フレーピラが名の起こり〈フレーピラ〉
さ三郡の境にそびえる両古美山〈両古美山〉
き金次郎見ながら通った小学校〈二宮金次郎彫像〉
ゆ幽霊の写真で人気の当丸峠〈当　丸　峠〉
め名水は泥の木川の滝となる〈古平上水道〉
み港町丘はリンゴの花盛り〈リ　ン　ゴ〉
し七軒町茂みの中に名が残り〈七　軒　町〉
ひ火渡りの伝統守る猿田彦〈火渡り神事〉
ももう一度逢ってみたいな羅漢さん〈五百羅漢〉
せ節分の豆で占う鰊漁〈豆　占　い〉
すすけそ漁吹雪の浜に大漁旗〈すけそ漁〉
んンだンんだ皆で知恵出せいろは歌〈古　平　弁〉

今まで、古平町の歴史や特徴的な事がらについて紹介してきましたが、まだまだ多くのものがあります。

順番にこだわらないで、また新しいものを歌にして続けていきたいと考えております。

また、町内の皆さんから解説文無しでも募集しますので、更なる傑作をお寄せください。

戦中 中蹕

泣き笑いの樺太漁場体験記

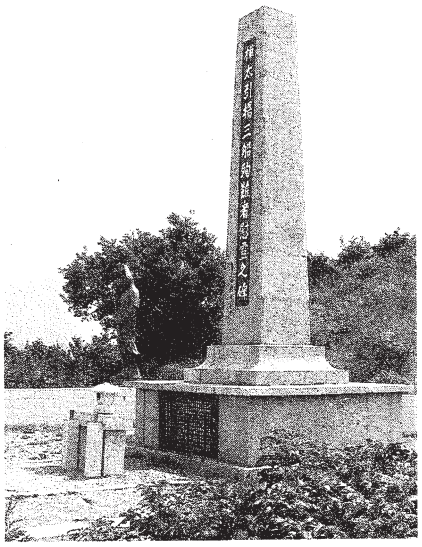
戦後 後蹕

吉野慶一郎

町を襲った突然の悲報　あれは、終戦の日から一週間も過ぎた頃のことだったでしょうか。突然、身も心も震い上がるような大事件がラジオのニュースで伝えられ、野田の町は大騒ぎのあと、深い悲しみに沈みました。

その事件とは大泊から稚内、次に小樽、函館に向けて航行中の引揚船小笠原丸・泰東丸・第二新興丸の三隻が、次々と国籍不明の潜水艦からの攻撃を受け、約千七百名の死者と行方不明が出たというものでした。

そのうちの判明した氏名が発表されると、その中には野田町の人の名が何名もあり、つい先日元気に出発したばかりなのに、余りの意外な出来事に耳を疑いたくなる程の衝撃を受けました。



樺太引揚三船殉難者慰霊之碑

一八日に野田からの引き揚げ第一陣として、無事に乗船することが出来たと聞いて安心していたのに、その人たちがなぜこんなことになったのか？　喜びのあとだっただけにその人たちの不運であったことを慰める言葉もありませんでした。

国籍不明の潜水艦とは何たることか。わが国の政府は、戦後すでに六〇年近くも経過しているのに、この事件の真相を解明することなく、今なおナゾのまま見捨てられているということは不思議でなりません。犠牲者も遺家族もどんなにか無念の思いであろうかと推察いたします。

千望台に立つ　戦後に殉難者慰霊之碑　なり社会福祉関係者や多くの有志の方々の募金によって『樺太引揚三船殉難者慰霊之碑』が、あの悲しい海を望む、留萌市千望台の丘に建てられ、毎年八月二二日、遺族や関係者によって慰霊祭が行われていると聞いております。

その碑文を写しますと、

「昭和二十年八月二十二日早暁の海は、北西の風小雨霧視界を覆う。この日小笠原丸、第二新興丸、泰東丸の三船は、戦乱の樺太より緊急疎開の老幼婦女子、乗組員五千八十二名を乗せ留萌沖にかかりしが、突如、潜水艦の雷撃砲撃に遭い、瞬時にして沈没或は大破し、千七百名の尊き生命を奪う。畢生の地樺太を脱し数刻、夢に描きし故山左舷にしてこの惨禍に遭う、悲惨の極みなり。星霜ここに十七周年、我等同人この碑を建て永く聖霊を祈念する』

引揚げ三船の受難の状況、祖国への上陸を目前にして、その希望を一瞬にして失った、悲運の亡き人を偲ぶ文面に深い感銘を受けました。私も樺太引き揚げ者のひとりとして、碑の建立に尽力された多くの人々に敬意と感謝の念でいっぱいです。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

(14)　橘　義春

ラッパ終業兵を命ず（続く）

「ソドミドミミードミ・ソミミミミソミード」と言ったぐあいに、全員が暗唱できるまで徹底的にやる。それが終わると、いよいよラッパで譜面通りに吹奏する技術を学ぶ。全員で合奏していて、一人でも間違うとすぐにわかってしまい、何回も何回もやり直しが続き大変な努力が要求される。

冬将軍が本格化し、厳寒の中での教育である。火の気のない演習場か野外でやるが、何しろ寒い。防寒外套(がいとう)、防寒靴、防寒帽、防寒手袋と一応は身につけてはいるが、寒くて、手も足も感覚が無くなってしまうこともある。

ラッパも内地で使っているようなものでは、厳寒の樺太では使用できない。吸い口が金属だと、寒さで唇にペッタリ凍りつき、唇の皮がペロリとむけてしまう。北国で使うラッパは特別製で、吹き口がベークライトで出来ている。これならいくら寒くても唇に凍りつくということはない。

厳寒の連日の猛練習で、どうやら皆が譜面通りにラッパが吹けるようになった。

あとは楽なもので、兵営内で行進曲を吹きながら行進したり、営門を出て気屯の町を流して歩いたり、農家に立ち寄ってジャガイモをご馳走になったり、中川教官と気屯川で鮭を捕まえたり、歌のうまい者に演歌を歌わせ野外演芸会をやったりして、けっこう楽しい日々が続いた。

ある日、岩崎上等兵が特に私を指名して、皆の前で『足洩き』の曲を吹奏させ、「どうだ、どこにも文句のつけようがない吹奏だろう。うまい、よく勉強した」と言って、褒めてくれたことがある。

以前小学校で、一年間だったが正規にラッパを習ったことが大きくプラスしたと思う。苦しい修業だったが、やっぱりラッパをやって良かったと思うようになってきた。

ラッパの検閲の前に筆記試験が行われた。猛勉強をしたおかげで九八点をとり、成績も上位に入れた。

やがてラッパの検閲の日がきた。雪の中の練兵場で行われたが、中川教官も、今回の修業生の吹奏技術は全体的にレベルが高いと、胸を張っておられた。検閲場には吉村連隊長、連隊副官、各中隊の中隊長が全員ずらりと並んだ中で行われた。何か月間の苦労の成果が問われる日だ。ここで頑張らなくては中川教官に申し訳がたたない。皆も私同様の気持ちで、今日この検閲場に臨んでいるのではないだろうか。

検閲官が、誰に何の曲を吹けと言ってくるかわからない。皆も緊張気味だったが、どうやら指名された者はうまく吹きこなした。私には吹奏の指名がなかったのでホッとしたが、最後に全員で行進曲を吹奏して無事検閲が終了した。

検閲官から、検閲の結果が連隊長に報告され、しばらくして連隊長から講評があり、

「良好である」

と、発表された。

「やったァー」と思った。

寒風の中での何か月もの苦しい修業だったが、それがやっと報われた、という気分だった。

何の検閲であっても、連隊長からの講評は、

「おおむね良好である」

が通り相場であり、「良好である」などは、めったにない破格の賛辞と受け止めてよいと、中川教官もうれしそうであった。

これで名実共にラッパ手になった。数日後に、連隊本部から正式に『陸軍喇叭手を命ず』の命令会報が来た。（続く）

連作

古平まで

坂本甚衛

(一)

この稿の作者、坂本甚衛という名にどこの馬の骨か？　と首をひねる方も多かろう。そこで一応、最初に私という男のこれまでをざっと紹介しておこうと思う。もともと読者というものは物語（ストーリー）を読むと作者に関心をもつものだ。

平成十三年の春まだ浅い頃、私は住み慣れた余市町から、この忘れられたみたいな蝦夷の古都・古平へ引っ越して来た。当町出身で、現在は余市に住む年上の友人がそのとき言った。

「坂本さん、普通の人だばあぇんた古平より、少しでも便利な余市さ出るべと思うのに、あんたは反対に余市から古平さ逆戻りするんだもんナ」

言われてみればその通りである。私にはそれなりの理由があったのだが・・・・。

この三、四年来、突然、私は体調をくずし入退院を繰り返して来た。そして、玄関から門前までの除雪もおぼつかなくなりつつあった。ちょうど折も折、当町へ嫁している娘が、それなら余市の家を売ってこっちへ移って来たらどうだの、と言ってきた。

半世紀近くも居を構えた余市には知人も多数居り、離れるのは正直言って余り気の進むものじゃなかった。その家とは、本州で建設業を営む義弟が、天然の秋田杉を主体にあちこちで加工刻んだ後、十一トンの二段扉、平ボディ車二台に積んで来て、手持ちの大工や板金屋も動員して余市に宿をとり、仕上げてくれた極めて住みやすい家だった。

この家を売って行くのか、とかなり逡巡したのも事実である。しかし、考えてみれば、家より何より自分の健康が先である。いくら立派な家だろうと、棺桶の中まで持って行くわけにもいくまい。

そもそも立派な家に住みたいとの願望は、自己満足から発していると言ったら語弊があろうか。

ひるがえってみるに、人間死ぬ時はみな裸で死ぬ。総理もホームレスもなべて変わりがない、と割り切り、それまで娘夫婦が入居していた家を明け渡した後の茅屋へ私と妻が移転して来たのである。娘たちは同町内のやや大ぶりな家を手に入れ引っ越した。移って来てみて初めて気がついた。いかに以前の家が採光も良く、建組みも頑丈で、三十年近く使っても一分も狂わず、義弟ら一行が良心的に造ってくれたかの実状に――。

全く家というものは一見しただけでは分からず、一週間、十日と暮らしてみて初めてあそこが悪い、ここが良いと納得のいく代物なのである。かつて義弟が余市の旧宅に取り掛かっていた工事中、走行中の車の中から、窓外の何人宅とも知れぬ邸を指差し私が言った。

「おい、あの家ええな」

「なしてよ」

「大きいからよ」

「家って大きいばええもんだってか？」

「んだべょ。違うのか？」

との不審に、義弟は憮然と目を上げ応えた。

「家ってものはな、北海道・・・・（私のこと、少年時代からの親友である彼はいつもこう呼ぶ）外の見栄えであれこれ言うもんでねぇ。中の造作で勝負するもんだでぇ」

建築屋を志して数十年、今では一家をなした彼の処世訓をおもむろに披瀝（ひれき）した。

なる程それだもの、売ると言ったら見に来た町内の大工が一発で気に入り、ぜひにと案外良い値で売れたわけだ。それに比べたら、現在住んでいるこの家の何（か）と見すぼらしいことよ。終の住み処と決めたのは間違いだったか、の感しきりに往来 ⬅

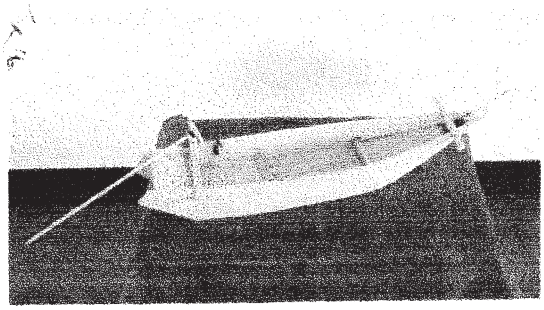
日本型船（和船）

北海道沿岸でよく知られている和船は川崎船と、北前船と呼ばれている弁財船（べんざいせん・べざいせん）でしょう。古平では川崎船のことを単にカワサキと呼んでいました。また、川崎船はそれぞれの地方で少しずつ改良され、形も違っていることから○○川崎船などと、地名をつけて呼ばれることが多いようです。

明治時代には北海道改良川崎船が作られ、タラ・イカ漁に重用されたほか、船団による北洋サケ・マス漁の漁船として大活躍していました。

古平では、明治初期からニシン漁に使われ、後に三半船（さんぱせん）と併用されていましたが、この三半船というのもよくわかりません。へさき（舳）の突き出ているのが川崎船、これが出ていなくて全体に幅の広いのが三半船、とも言われますがどうもはっきりしません。

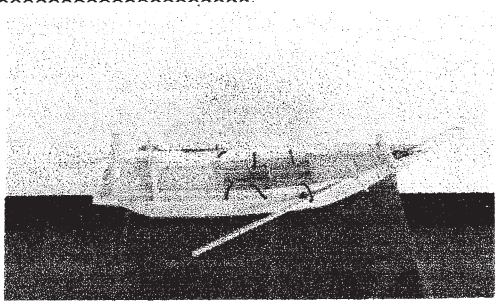
川崎船は荒波を乗り切り、速力も出て航行性能が良く、構造も頑丈だったことから日本海での代表的な漁船でした。



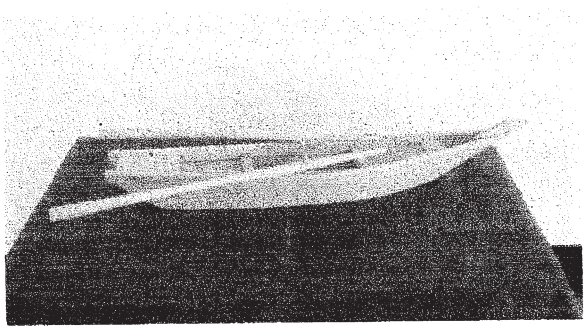
川崎船模型↑

―札幌古平会から寄贈―

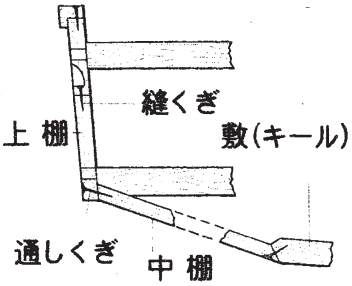
和船模型の展示



川崎船模型↓全長59センチ↑37センチ



構造の断面図↓



←するのも、またむべなるかなである。

中でもとりわけ気にくわぬのは、午前中陽が差せば午後は当たらず、電気系統はどこのド素人がやったのかと思う程要らぬところは虚飾に飾り立て、必要欠くべからざる場所は手を抜く、といった按排（あんばい）のシケた家なのだ。

それなら大工を頼み直せばよかろうというかも知れぬが、覇気日増しに衰えゆく身にそんな時間的余裕も金もありはしない。誰を怨むべくもない、すべて自分自身が悪いのだ。不治の病に見舞われた己が体と、老いてなお転々とする自らのあいまいな流浪的性（さが）を呪うよりないではないか。

今日も登校する数少ない中学生以外は、朝から人っ子も通らぬ目の前の道を眺めては、帰らざる日々に苦笑するよりないのである。

※都合により《俳句鑑賞》は今月お休みします。

短歌

古平町岬短歌会

葺き替へし土蔵の屋根瓦日に照るを娘と肩よせ見上ぐしばしを
フルーツ街道その名のままに鈴なりの林子葡萄の香の中を往く
池田　テル

新聞に山科の別れの解説ありわれに「おりく」を踊る力ありや
誰となく年齢相応をうべなひて忘れ事など言ひ笑ひあふ
鈴木　時子

年毎に短かく想ふ一年は私だけの生き方ゆえか
降雪の遅い今年は漬物の味を気使ふ主婦らの話題
田中　香苗

古平沖に横一線に並ぶ灯は街あるごとしいかの漁火
冬の海暗に浮かびぬ漁火にいかの大漁祈りて見つむ
丹後　初江

朴落葉庭にたまりて風の吹く度に音立て道路を走る
「面構」シリーズをみし美術館出づれば銀杏一面に散る
東　美知

打ち寄せる度に飛沫をあげる波テトラポッドに薄く凍れり
庭隅に寄り積む枯葉を濡らしふる雨は霰となりて暮れゆく
堀　典子

俳句

古平俳句会

船の名で呼び合ふ船頭ほほかむり　斉藤波留
小鳥来て一と日楽しや明日の日も　山口悦子
高き天一声発して鵬翔ちぬ　越野敏雄
鱈汁に浜言葉のせ馳走せり　大和田絵伊
口淋し軒下吊す助宗鱈　福井幸平
岩肌の枯葉色々風さらふ　高橋重子
全山の黄葉の盛る島の旅　仲谷比呂古
街路樹の手早く進む冬囲　室谷弘子
畑の空飛翔の鳶の師走かな　泉清三
山々は紅葉の緞帳下り始め　外山俊久
朽ち果し無人番屋の冬に入る　渡辺嘉之
け嵐を割りて帰港の助宗船　堀典子
日本海黙して冬を待つ構へ　越野清治

古平町史年表

昭和３年（1928）　～ 続き

▲古平信用組合が古平魚菜市場を開設する

▲余市～余別間の鉄道敷設が、鉄道省の予定線に決定する

▲古平～美国間の道路改良工事が完成し、町村負担分として古平町は4,300円を支出する

▲桐材の価格が上り、傾斜地などに桐が植えられる

▲造田に対する奨励金が給付されることになり、年度末の水田面積は約４０町歩（40ヘクタール）余りに増え、収穫高８００石（600トン）、前年より３割２分余りの増収となる

▲１２月末現在、古平町の人口　７，１９７人（男3,479人・女3,718人）
戸数　１，４０９戸　前年比　戸数－19戸、人口－233人

昭和４年（1929）

▲暴風雪のため湾内で発動機船５隻が難破し、定期船瑞広丸（末広丸？）が歌棄海岸に座礁する

▲スケソが大漁、刺網１把に２００尾も掛かる。１尾１銭では漁にならないと早々に切り揚げるところが出る

▲灌漑溝組合総会で、資金難から事業を町に移管することを決定する

▲古平製材会社を設立する

▲欠員であった古平町長に武田典が任命される（2／21）

▲電気会社古平営業所が発起人となり、鰊大漁祈願祭を郷社琴平神社で行う

▲電気の取扱について、古平小学校で講習会が開かれる

▲古平漁港船入澗建設を道に陳情する

▲東部火防組合（浜町方面）が、防火についての投書箱を浜町町内５か所に設置する

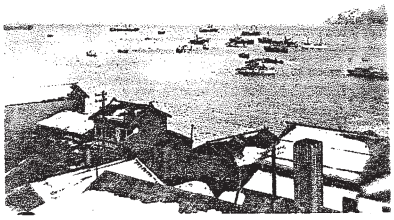
▲昭和３年度、中学校・女学校へ進学したもの古平小学校・同鴨居木分教場・沖小学校卒業生193人中８人（男子5人・女子3人）

▲浜町でゴミ焼却後の出火を夜警番が発見し消し止める

▲越中から来た帆船第一銭丸が種田の浜に座礁する。その外漁船１０数隻が前浜で難破する。新聞は１万数千円の損害と報道

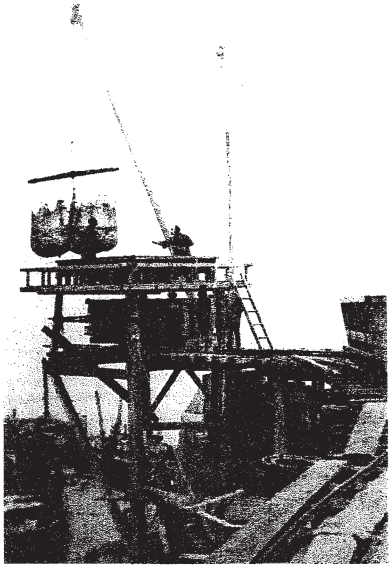
▲㋑山口漁場で、鰊陸揚げ用のウィンチの動力にモーターを利用したことから、電化普及のため札幌堀内商会により鰊漁の映画撮影（1巻・約7分）が行われる

▲船入澗築設工事費として、昭和４年度より同９年度にわたり23万1千円の補助金交付の指令を受ける

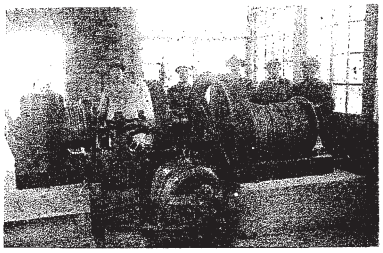


↑昭和初年頃の古平湾内風景

↑本陣の浜でスケソ陸揚げ



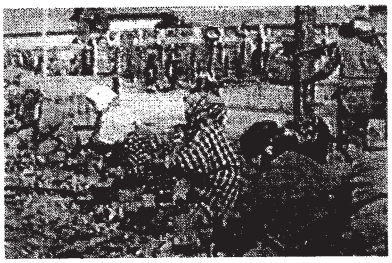
↑㋑山口漁場のウィンチ

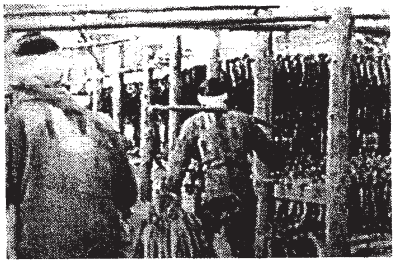


↑モーターを設置した機械室

▲担当技師を委任し、築設のための実地調査に入る
▲春先の暴風により漁船１０数隻が座礁する
▲鰊不漁から鰊漁業税の減免運動が行われ、道に陳情書を出す
▲恵比須神社で浜町大火１０周年記念鎮火祭が行われる
▲全道火災予防デーに小学生などが旗行列をし、自動車３台がこれに参加する。夜、小学校で映画会が行われ満員となる
▲沢江村・唐牛方から出火して２戸を焼失、３人が焼死する
▲㋑山口金治所有の公園・偕楽園で公園祭りが行われ、売店も多数出て、自動車で行く見物客もいる
▲結核予防デーで、料理屋組合の仮装行列が参加する
▲札幌苗穂小学校の児童が修学旅行に船で来町し、艀（はしけ）で△（鼠ろう）・）仲谷の浜に上陸して番屋に宿泊する
▲北大大島教授の水産講話が役場で開かれる
▲余市～余別間の鉄道敷設案が衆議院を通過し、貴族院に回付されたが、田中内閣の総辞職により審議未了となる
△田中内閣の後に浜口内閣が成立したが不況から株価が暴落し、浜口首相がマイクの前で「緊縮財政への協力」を放送する
▲ホトトギス同人「木の芽」主幹・石田雨圃子が来町する
▲演習中の第一艦隊36隻が小樽に入港し、見学の団体客が共栄丸で小樽へ行く、往復料金1円20銭

⬇記録映画から複写した映像





編集雑記

▽暦は正月から始まりますが、近ごろはクリスマス行事が盛んになって、伝統的な正月行事は、生活の中から消えていくものが多くなってきました。寂しいことですがこれも時代の流れとでもいうのでしょうか。張り切っているのはお年玉を期待する子どもたちと、不況の中、商売繁盛を願う商店街のようです。

▽新年号といえば、むかしから厚っぽたくてきれいな口絵で彩られ、それに楽しみな付録も一段と豪華でした。今回《せたかむい》も付録はありませんが、新年を飾って増ページをしました。正月のひとときくつろぎながら読んでほしいと考えております。

▽冠婚葬祭というのは日本古来の礼法のことで、加冠・婚礼・葬礼・祭祀の四つを略したものですが、その中の加冠「戴冠の儀」が現在の祝日・成人式です。今年は一月十一日です。日本人の好きな六輝（ろっき）（大安・仏滅・・・）では友引日です。友を引っぱって来てお互い大いに祝福しましょう。

ふるさとを同うしたる秋天下

文化（ぶんか）会館の門近くに建つ高野素十の句碑にある句です。

▽今月号でお気づきかと思いますが、古平俳句会の新入会員が増え、俳句の普及活動がさらに期待されます。越野会長さんのもと、毎月の句会も大変盛況と聞いております。

▽今月号に、坂本甚衛さんが体調不良をおして原稿を寄せてくださいました。ご本人の原稿に「どこの馬の骨か？」とありましたが、全道の地質調査の仕事をされ、退職後は『余市文芸』への投稿や編集の仕事をされておりました。

▽高橋健一さんから、イカつけのトンボ（山手）と、氷を挟む鈎（かぎ）を寄贈していただきありがとうございます。冷凍会社などで使われたのかも知れませんが、昭和八年の記録に「浜町・変電所付近で氷切りをしている」とあります。

▽《せたかむい》を町外への手紙に同封して送ってくださるようお願いいたします。